

弥生時代前期「遠賀川系土器」をめぐる諸問題

～朝日遺跡Ⅰ期をめぐる～

永井宏幸*

はじめに

今回の調査区は、国史跡貝殻山貝塚に南接する場所である。朝日遺跡としては南西端に位置する。調査の結果、遺跡の西南端であることを追認するとともに、前期の遺構群が朝日遺跡において初めて確認できた。特に、貝殻山貝塚を囲むと想定できる環濠の検出は、朝日遺跡の変遷を考えるうえで重要な発見と言えよう。併せて、前期土器

の出土量も従来の資料数をはるかに上回り、尾張平野低地部のみならず、伊勢湾周辺における前期土器様相を考えるうえで重要な資料群となろう。

本稿では、今回の調査区出土土器を中心とした分析を行い、朝日遺跡Ⅰ期の土器編年を提示する。これをもとにⅠ期の遺構変遷を導き出す。

1. 土器編年研究の現状

尾張平野の編年作業は遠賀川系土器を中心に組まれ、前期を大きく2つに分けて捉えられてきた。すなわち、前半は「貝殻山式」と後半は「西志賀式」とされてきた。一方、三河地域を中心に分布する条痕紋系土器を中心とした編年作業では、前期をやはり大きく2つに分けて捉え、前半は「樫王式」、後半は「水神平式」とされてきた。そしてこの2つの地域編年の併行関係、言い換えると遠賀川系土器と条痕紋系土器の併行関係および相伴関係は、西志賀貝塚・貝殻山貝塚・二反地貝塚などの各調査に代表される型式学的研究および層位学的検証により、前半と後半の各型式（様式）が併行関係にあると認識された。

近年、尾張平野部の調査事例が増加し、遺構あるいは遺跡単位の比較検討が可能となった。これらの調査事例をもとに石黒立人は、山中遺跡の報告で遠賀川系土器を4期7小期区分**した（石黒

1992）。尾張編年は、遺跡相の比較検討をとおして導き出した型式学的組列に重点をおいたものである。

ところで最近、遺構出土の資料が増加しつつある。ここ数年に調査された遺跡をあげると、一宮市元屋敷遺跡（土本1998）、同市三ツ井遺跡（田中1999）、同市八王子遺跡（樋上1997など）、稲沢市野口北出遺跡（北條2000）、春日井市松河戸遺跡（村松2000）などがある。

三ツ井遺跡では、突帯紋系土器であるケズリ調整深鉢と遠賀川系甕形土器が折衷して成立した削痕系深鉢***の出現期を示す良好な資料が確認された。その中には、口縁端部に横長の連続押圧を加え、頸胴部界を意識した調整及び器形を備えた氷式系深鉢形土器の特徴がみられた。単純に在来の突帯紋系深鉢形土器と遠賀川系甕形土器の折衷土器として捉えることができなくなってきた。

*愛知県埋蔵文化財センター 調査研究員

**以下、「尾張編年」とする。

***紅村のいう元屋敷式土器あるいは削痕系遠賀川式土器を指す。

2. 朝日遺跡 I 期の資料

(1) 95・96 調査区の資料について

S B 07 (図1:左上)

有段口縁の壺(32)・鉢(36)と突帯紋系の鉢(44)・深鉢(45)が出土している。尾張編年では I-1 期に相当する。一方、削出突帯を有する壺(29)・甕(40)も共伴するので I-1 ~ 2 期の資料群といえる。

ところで、S B 07 は周辺に新相を示す遺構群が存在する。そのためか、削出突帯少条の壺(33)や胴部上位に半截竹管状工具による沈線紋を施す甕(41~43)や口縁部が短く折れる鉢(38)が含まれている。混在とするか共伴とするかは類例の増加を待たなければならないが、上記の古相を示す資料群を優先させ、後述する遺構と比較検討し改めて評価したい。

S K 118 (図1:右上)

貝殻山地点抽出資料によって設定された I-1 期に比較的近い壺(50)、すなわち頸部の削り出しによってつくりだす「段削出」が存在する。また、S B 07 に比べて口縁部が大きく開き、削出突帯を有する壺(53)は I-2 期を遡らない資料と考えられる。したがって、S K 118 は S B 07 より後出する資料として考えられる。

S D 42・43 (図1:左下)

頸部の段削出をもつ壺(81)や S K 238 にみられる口縁部が大きく開き、削出突帯を有する壺(83・84・86)などがある。さらに、指で貼付突帯部分を摘み出す「指づくね貼付突帯」をもつ壺(82)、断面三角形の先が尖った貼付突帯をもつ壺(87)、削出突帯をもつ貝殻山 B 類(88)などが伴う。

甕・深鉢については、有段部分未調整の甕(89)、氷式系削痕深鉢(91)、氷式系削痕深鉢と遠賀川系甕の折衷土器(90)がある。

これらの資料から S D 42・43 は S K 118 に比べて新しい様相を含むと考えられる。

90 のように遠賀川系土器の形態を保ちながら板ナデあるいは板ケズリを行うタイプは削痕系甕(深鉢)のなかでもより新相を示す。類例としては、三ツ井遺跡 S K 01・月縄手遺跡 II S X 101・S K 154 などがあげられる。

壺に関しては、「段削出」と削出突帯少条といった比較的古い要素を持ちながら、口縁部の外反は強く、87 のようにほぼ水平にまで外反する形態はより新しい要素である。88 は今回改めて定義した「貝殻山 B 類」*の壺(88)である。

S D 45 (図1:左下)

壺は頸部に指腹押圧を加える貼付突帯をもつもの(97)や口縁内面に注ぎ口状の貼付突帯をもつもの(98)がある。

壺の紋様として押圧あるいは刻みを施した貼付突帯があるタイプは、貝殻山 B 類と「指づくね貼付突帯」をもつタイプを除けば、紋様のなかでも新しい要素である。

甕は貝殻山 B 類がある(103)。口縁部は稜線をもって折れ曲がり、胴部にくらべ膨らみをもち端部に面を持たない。口縁端部に刻み、口縁内面に横ミガキ調整、胴部上位に半截竹管状工具による横位沈線紋、縦方向の長いピッチのハケ調整など定型化したタイプである。ただし、口縁部が水平に折れない点では古相を示す。

把手を 1 対もつ鉢がある(104)。伊勢湾周辺では比較的限られた時間幅で出現消滅する特筆できる器形である。

S D 101 (図2)

壺にはおおきく 2 つのタイプが認められる。一つは、頸部がやや長く直立し、口縁部が大きく外反する。胴部が口径より大きく張り出し、底部に

*貝殻山 B 類について、以下の特徴をあげる。

- (1) 壺・甕を問わず、施紋具は半截竹管状工具を多用する。
- (2) 遠賀川系土器の紋様をベースに東日本縄文時代晩期の精製土器群に多用される工字紋を取り入れた独自の紋様。
- (3) 器壁が焼き締り、色調が赤褐色となる焼成。
- (4) 器種構成は壺と甕を中心に若干の鉢が伴い、蓋・高杯はない。壺は比較的大型品の頻度が高い。
- (5) (1) ~ (4) の特徴を合わせ持つ土器群は多量の雲母が混入する。

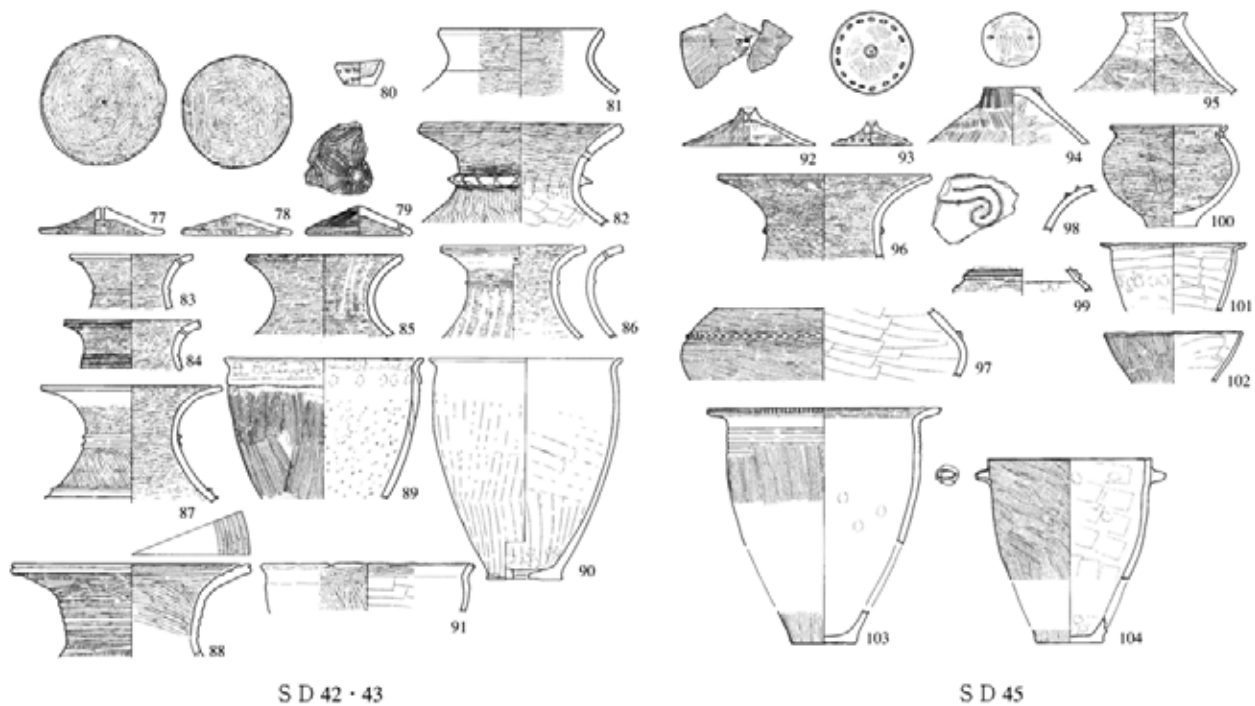
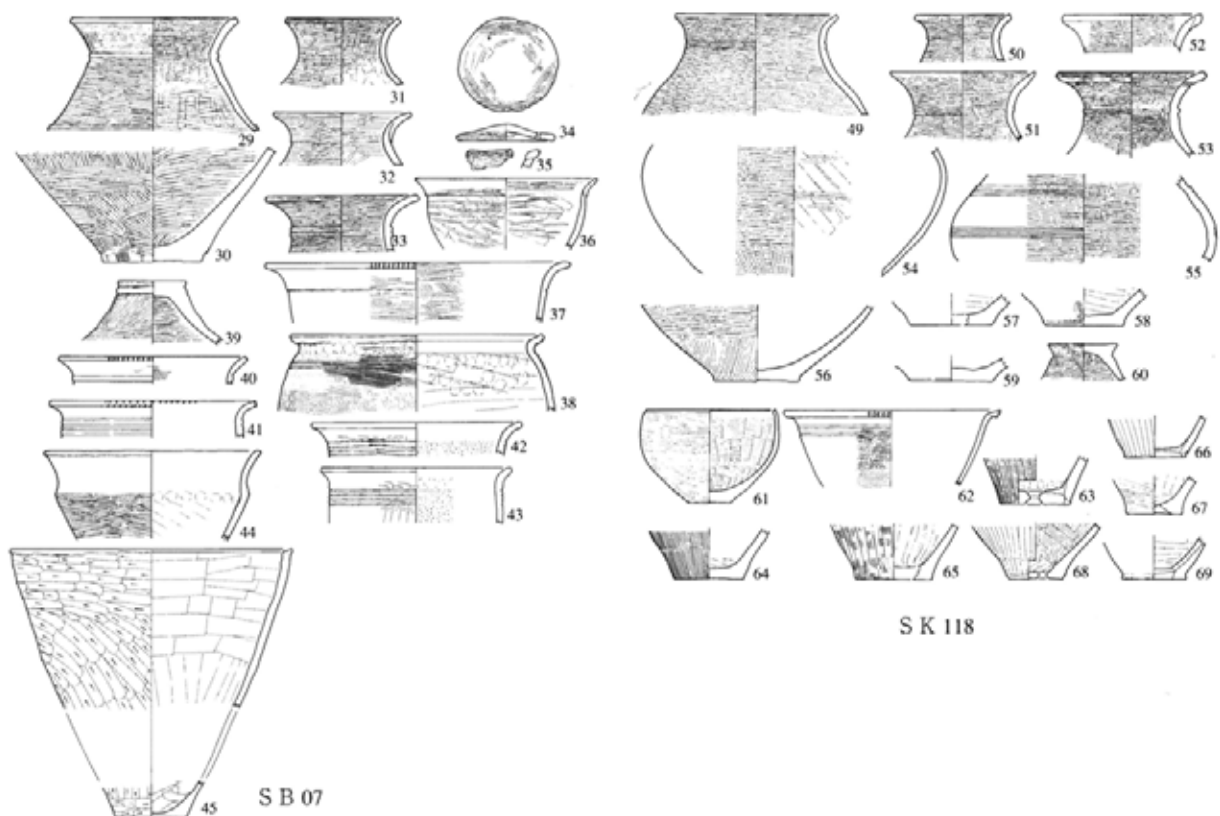


図1 95/96調査区各遺構出土土器 S = 1/8

向かって急にすばまる器形(170)。もう一つは、胴部最大径から頸部まで緩やかに内傾し、頸部から急に開き口縁部にいたる。胴部最大径は口径とほぼ同じかあるいはやや胴部の方が大きい。胴部最大径の位置は胴部中位あるいはやや下位に位置する。胴部は丸みを帯び緩やかに底部へいたる器形(171)。傾向としては前者が古相、後者が新相を示す。

さらに注目したいのは、貝殻山B類と貝殻山A類*の折衷土器が見られる点である(277)。277は朝日遺跡のみで認められる現象であるが、説明を加える。貝殻山B類の口縁内面にみられる隆帯は隆帯部分に刻みを入れることはない。刻みを口縁端部上端に入れることはあるが(278など)、277は貝殻山B類の施紋規範から逸脱する。また、貝殻山B類に特徴的な雲母粒子が目立たない。このような現象は壺に限らず甕にも認めらる。さらには朝日遺跡固有のものではなく、尾張平野では山中遺跡・野口北出遺跡などでも認められる。

壺の紋様としては、頸部および頸胴部界の沈線帯も多条化する。沈線帯と貼付突帯の組み合わせ、貼付突帯の単帯から複帯へとといった様々な組み合わせがみられる。

甕は胴部が直線的にすばまり底部にいたる器形と胴部上位がやや丸みを帯びて張り出す器形の2者がある。前者は古相から継続して認められる器形であるが、後者は新たな器形として特筆できる。口縁部は貝殻山B類の甕と同様に水平に折れるものが多い。胴部上位の横位沈線帯も多条化する。

壺蓋(185・283)は、壺や甕の底部が上げ底になった形態を逆位にしたようなリング状の摘み部分を持ち、SB 07(39)やSK 118(60)にくらべ器高が高い。また、283はSD 45(95)とくらべて口縁端部(裾部)から摘み部分にかけて急に立ち上がる。185は95に近い、緩やかに裾部から頂部にいたる器形をなし、古い要素をもつ。

高杯(179・280)は杯部のみであるが、口縁部が稜線をもって折れ曲がる形態をとる。他の遺跡との比較検討を要するが、顕在化するの新しい段階になってからと思われる。

壺蓋は無紋化傾向にある。SD 101の場合、全形が確認できる資料18点中、有紋のものは5点でこのうち3点が沈線をめぐらせるのみであり、木葉紋や竹管状工具による列点紋と沈線紋の組み合わせ、赤彩紋などは見られない。ところで、SD 101より古い様相をもつ遺構にも無紋の壺蓋が存在する。しかし、沈線のみ単純な紋様構成はとらない、SD 42・43(79)・SD 45(93)が認められる。今回の資料において壺蓋の出土頻度は必ずしも高いとはいえないが、無紋化傾向を新相の要素として捉えることに異論はないであろう。

今回の資料群では条痕紋系土器の比率が極めて低い。後に器種別・系統別など統計的な説明は行うのでここでは朝日56B区の遠賀川系土器と条痕紋系土器の出土量を簡単に比較しておく。例えば、朝日56B区周辺のI期の包含層資料**は、64個体中、条痕紋系土器が28個体で条痕紋系土器の占める割合が41%ある。

SD 101(96区のみ)は、647個体中(削痕系深鉢は総数から外した)、条痕紋系土器が44個体、7%に満たない。さらに、条痕紋系土器は他の遺構資料からもほとんど出土していない。

上記のように、56B区周辺と95・96調査区周辺の系統比率の差異はそれぞれの地区的特徴を表す可能性があり、留意する必要がある。

さて、条痕紋系土器については資料数が少ないながらも以下の点が指摘できる。調整及び施紋に用いられる工具は401の深鉢を除きすべて二枚貝腹縁であること。401は豊川流域に多い二又状工具による縦位羽状条痕深鉢。

壺については、口縁部資料が4点(203・297・353・354)ある。いずれも口縁端部に押引紋ある

*今回は前期資料を4つの系統に分類した。

遠賀川系土器(貝殻山A類・貝殻山B類)

条痕紋系土器(貝殻山C類)

削痕系土器(貝殻山D類)

**報告書掲載実測図の口縁部資料で削痕系深鉢は総数から外した。

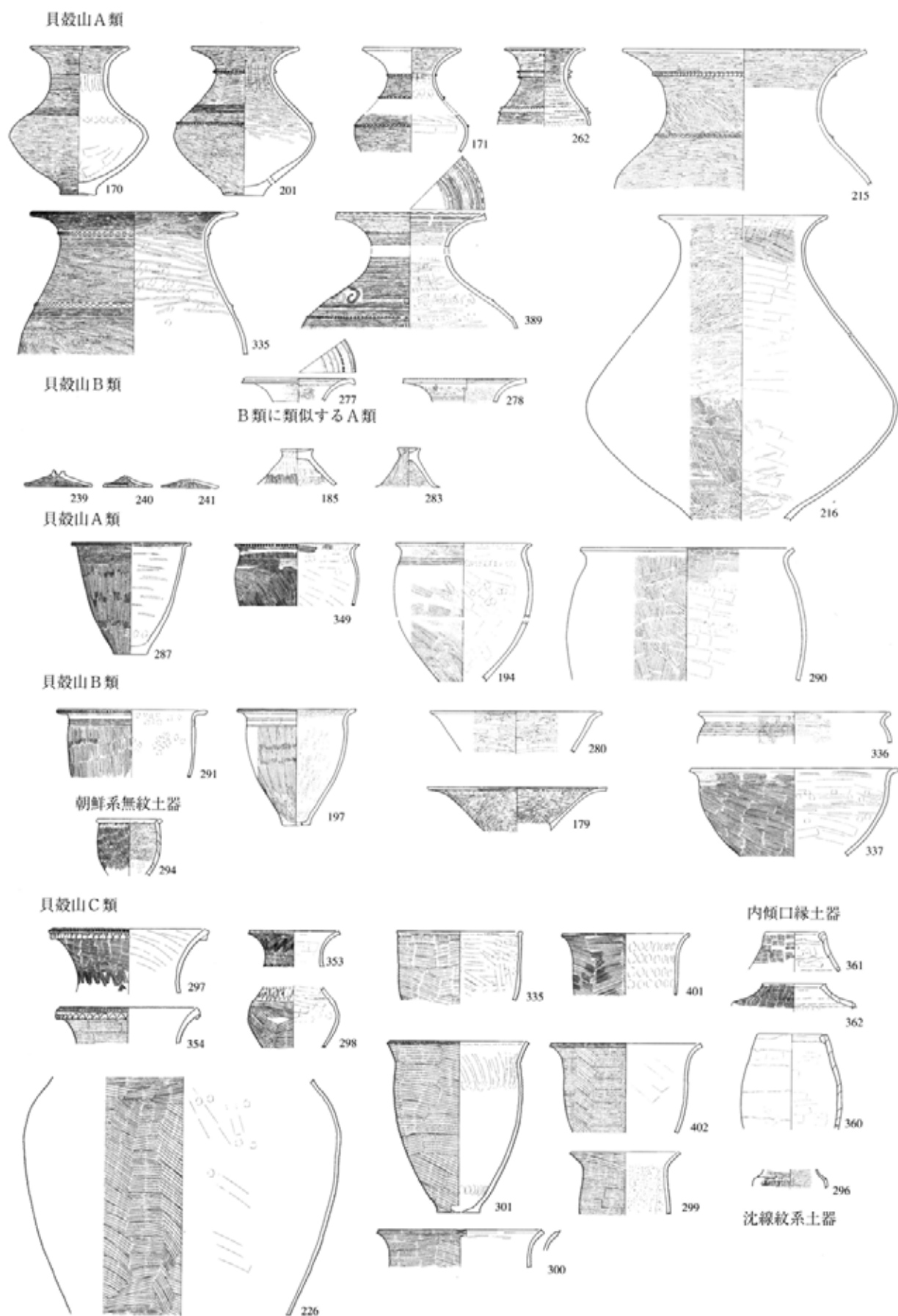


図2 95/96 調査区 S D 101 出土土器 S = 1/8

いは条線(353)があり、要素としては新しい。今回の資料には口縁端部ナデ調整の壺は存在しない。様相の指標となるのかどうかは不明。胴部資料は縦位羽状条痕を施す(226・298)もののみで、斜位あるいは横位条痕を施すものはない。頸部あるいは頸胴部界の波状紋については、203・226は不明、297は複帯の波状紋を頸部にもつ、298は頸胴部界に複帯の波状紋をもつ、354は頸部に単帯、頸胴部界に単帯?の波状紋をもつ、354は不明、以上の類例があげられる。波状紋は振幅より波長が小さく波頂部が尖る。口縁端部に押引紋をもつ資料が確実に波状紋をもつとは断言できない。例えば、波状紋をもたない可能性がある資料として、203・226・354がある。いずれも頸部以下の部位が不明であるため、波状紋を伴うか否かは確定できない。

深鉢(甕)については、口縁端部が外反しない砲弾形(204・205・355・444)を含むものの、ほとんどが口縁部が外反する甕化指向の強い資料で占められる。胴部には299・301の横位条痕を除くすべてに縦位羽状条痕が施される。縦位羽状条痕を中心に胴部の調整(紋様)をみていくと、3者がみられる。

(1) 最も多いのは口縁下から底部にいたるまですべて羽状の傾きが斜位の左上がりと右上がり交互に配される縦位羽状条痕を施すもの。

(2) 口縁下から胴部上位の甕でいえば頸部に相当する付近を横位あるいは斜位条痕が胴部縦位羽状条痕に重ねて施されるもの(206・208)。

(3) 一方が横位条痕もう一方が斜位条痕の組み合わせの縦位羽状条痕(402)がある。

羽状条痕からの型式変化を追えば、(1)から(3)への傾向は想定できるが時期差になるかは不明。

内傾口縁土器は、口縁部が外反せず内傾して筒状に立ち上がる土器である。胴部の調整からナデ

調整のみの「ナデ系内傾口縁土器」と、屈曲し口縁にいたる部位に二枚貝腹縁条痕を行う「条痕系内傾口縁土器」とがある。

ナデ系がほとんどで、器形は緩やかに内傾するタイプが占める。360は底部が欠損するものの、既存資料のなかで最も器形が把握できる資料である。器面は板?ナデ調整が行われるものの、接合痕が残る。口縁端部は内面に粘土紐をさらに付け加え、口縁端部をつくりだす。

条痕系はナデ系にくらべ、内傾の度合いが強い。362は厚口鉢に型式変化過程を示す。

(2) 貝殻山貝塚地点の資料(図3・4)

貝殻山貝塚地点は第1～4地点から出土している。ここでは、報告書掲載資料をもとに、95・96調査区資料と比較しながら検討する。

第1地点

(第5図、第11図-13・25、第12図-6)*

壺

口縁部は比較的大きく開くタイプが多い。胴部は大きく張り出す器形(5-10)や、胴部中位かやや下位に最大径をもち緩やかに底部へいたる器形(5-9)がある。

紋様は、頸部に削出突帯少条、頸胴部界に沈線少条、胴部に沈線3条のうえに斜格子紋を施すもの(5-9)、頸部に貼付突帯をほどこすもの(5-12・13)などがある。

壺に頸部少条の削出突帯をもつものはSK118(53)やSD42・43(86)が類似例としてあげられる。また、壺の口縁部が大きく開く点はSD42・43、SD45、SD101に顕著な器形要素である。一方、5-10のように扁平に胴部が張り出す器形はSD35やSD101に共通する。

甕

口縁部が短く外反し、胴部上位にやや膨らみをもちながら底部にいたる器形のもの(5-15・16)、

*図版番号は報告書に準拠する。なお、比較のため提示する95・96調査区資料は今回の図版番号をそのまま使用している。

口縁部がほぼ水平に折れる貝殻山B類(5-17)がある。

5-17はSD 45(103)と類似。その他の甕の器形に比べやや胴部上位が膨らむ点がSD 101に多い器形と共通する。

蓋

紋様のある壺蓋(5-1・2)と無紋の壺蓋(5-3~7)がある。5-8は甕蓋。

条痕紋系土器は壺(5-14、12-10)がある。5-14は口縁端部を面取りし、口縁下に指押圧を施す突帯が付く。12-10は口縁端部に押引紋、口縁下に指押圧を施す突帯が付く。前者が古く、後者が新しい様相を示す。

5-14の類例は見当たらないが、12-10の類例としてはSD 101(297など)がある。

第2・3地点

(第6図、第11図-21、第12-8)

壺

頸部が筒状に短く直立し、そこから緩やかに外反する口縁部をもち、頸部には削出突帯多条(6-1・3)。6-7は胴部が大きく張りだし、胴部中位に最大径を有する器形。頸胴部界に上下に太描沈線3条(半截竹管状工具の凸面を利用)、その間に指腹押圧を加えた貼付突帯の紋様構成となる。貝殻山B類。

6-1・3はSD 101(248)に類似し、6-7は紋様構成および器形がSD 101(328)に類似する。

甕

6-8・9は口縁部が短く外反し、胴部は緩やかに底部へむかってすぼまる器形。6-10は口縁部がやや肥大化し水平に折れる。胴部は上位でやや膨らみを保ちながら底部にいたる器形。貝殻山B類。

9はSD 101(346・347など)にみられる口縁端部の刻み目が下端になる。

第4地点

(第7~9図、第10図12・14~19・23・24・26~33)

報告では層位別に第I群~IV群に分けて資料提示されているが、ここでは器種別に提示する。

壺

【A】頸部あるいは頸胴部界に削り出しによる段をもつもの(7-1・2・5・6)、【B】頸部あるいは頸胴部界に1条の削出突帯をもつもの(7-3・4・22、11-12)、【C】頸部あるいは頸胴部界に少条の削出突帯をもつもの(7-7・8・14)、【D】頸部あるいは頸胴部界に多条の削出突帯をもつもの(7-9・10・12)などがある。

第4地点は、従来尾張平野における最古の遠賀川系土器として提示されている資料を含む。現在でも古相を示す資料として位置づけられるが、相対的にはSB 07よりSK 118に近い様相をもつ。SB 07ではBとCを含むものの、削り出しによる段ではなく、明らかに粘土帯の接合面を利用した段の壺(32)が存在する。Aとした段はSK 118(50)に見られ、段の型式変化を考慮すれば、後出するものである。層位的に上位で出土しているDはSD 42・43あるいはSD 101に類似する。

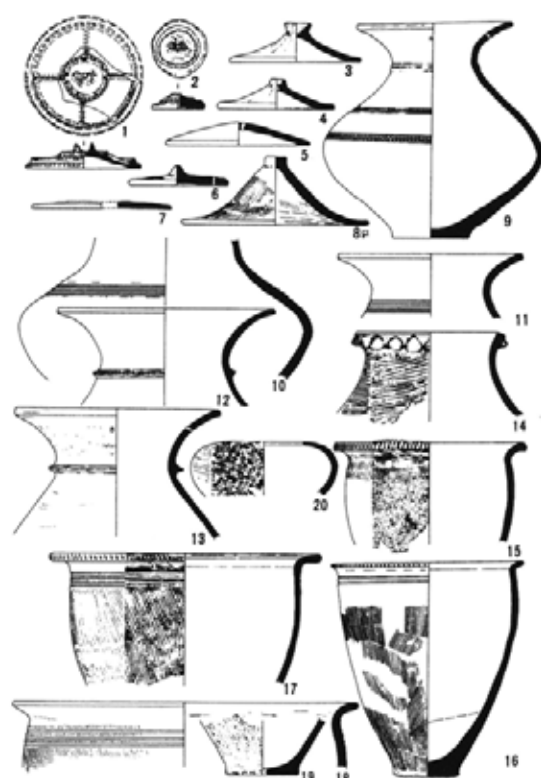
甕・鉢

【A】口縁部が短く折れ、沈線1条のもの(8-1・2)や【B】口縁部が短く折れ、沈線3条のもの(8-3・4・6)、【C】胴部上位が丸みを帯びて肩の張る器形のもの(8-8)などがある。

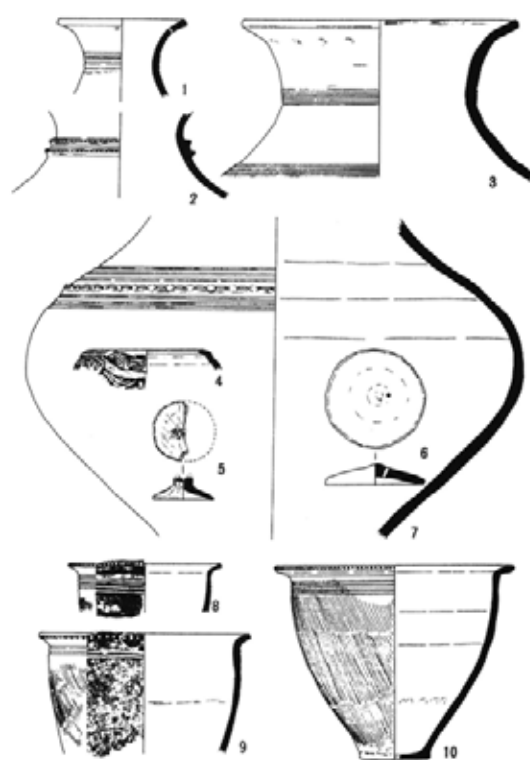
型式変化を追うと、AからCへと変化する。95・96の古相を示す資料は甕の出土頻度が極めて低く、比較が困難であるが、A・BはSK 118やSD 42・43と併行する。Cは前述したようにSD 101に類例が多い。8-12の把手付鉢はSD 45(104)やSD 101(341)に類似例がある。

深鉢

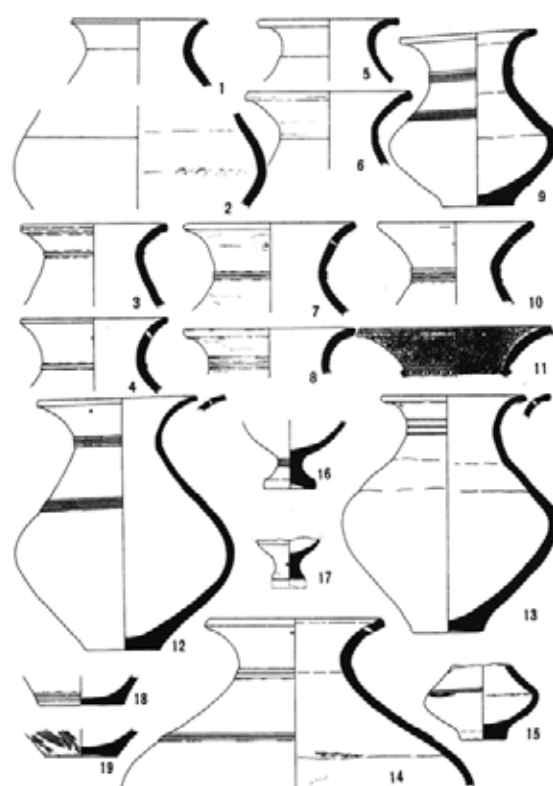
8-10は底部に木葉痕をもつ突帯紋系のケズリ深鉢。SB 07(45)と類似する。



報告書第5図



報告書第6図

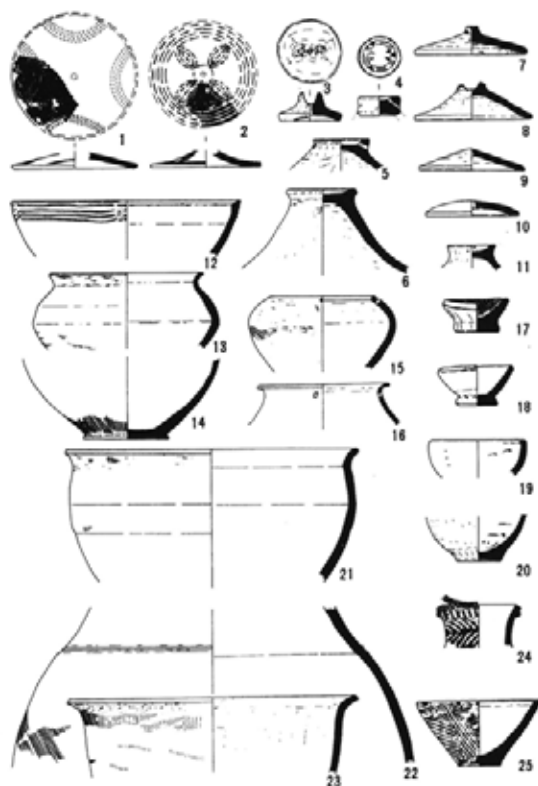


報告書第7図



報告書第8図

図3 貝殻山貝塚地点出土土器 (1) S = 1/8



報告書第9図 S = 1/8

図4 貝殻山貝塚地点出土土器 (2)



報告書第10図 S = 1/6

条痕紋系土器

8-15は頸部をもち、口縁部が緩やかに外反する器形の二枚貝腹縁による縦位羽状条痕深鉢。口縁端部は面取り仕上げ。

(3) 56 B区の資料 (図5)

前述したように遠賀川系土器に比べ、条痕紋系土器の出土頻度が高い地点。*

壺

口縁部は大きく開く器形が多い (59～64)。胴部は扁平に強く張るもの (71・159) が目立つ。

紋様はヘラ状工具による横位沈線帯が主体で10条前後 (72～74) のものもある。72・73は沈線帯が複帯となるもので、Ⅱ期の特徴をもつ。貼付突帯は1条貼り付け、これを2分割して複帯とし、刻みを加えるものがある (70・71)。全形の判明する159は沈線と貼付突帯の組み合わせが確認できる資料。調整は二次調整のミガキが粗雑なため、一次調整のハケメが残る。

甕

胴部上位に丸みを帯びて肩の張る器形が存在し、貝殻山B類の口縁も水平に折れるものが目立つ。

削痕系土器 (109・110) は口縁部が短く外反し、遠賀川系の甕に接近する。

条痕紋系土器

壺

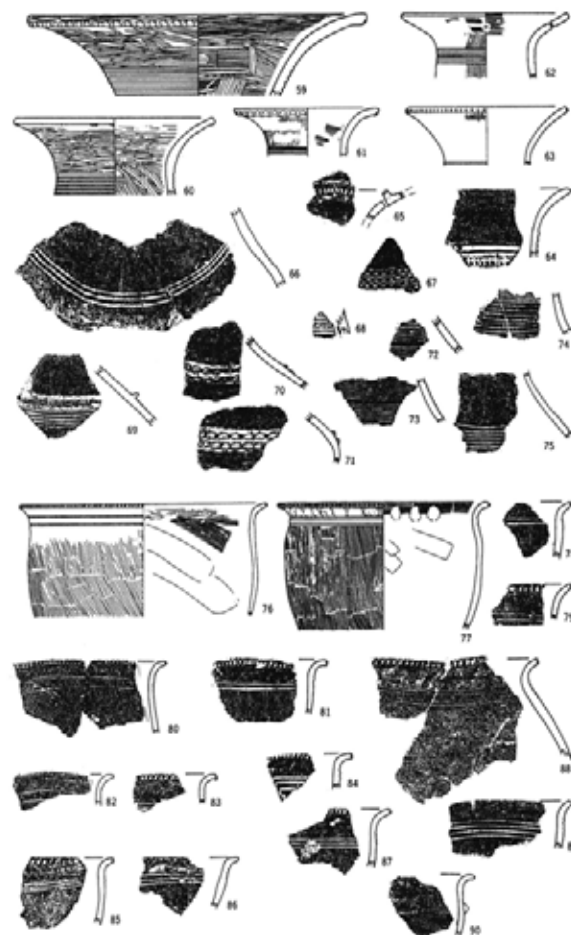
口縁端部ナデ仕上げ (118～122) と口縁端部押し引き (134～140) がある。

深鉢

深鉢も壺と同様に口縁端部ナデ仕上げ (124～133) と口縁端部押し引き (141～143・162・163) がある。胴部は縦位羽状条痕が目立つ。

以上、56 B区の資料の傾向は、S D 45およびS D 101に共通する。

* 貝殻山地点資料と同様に報告書掲載番号を用いて提示する。



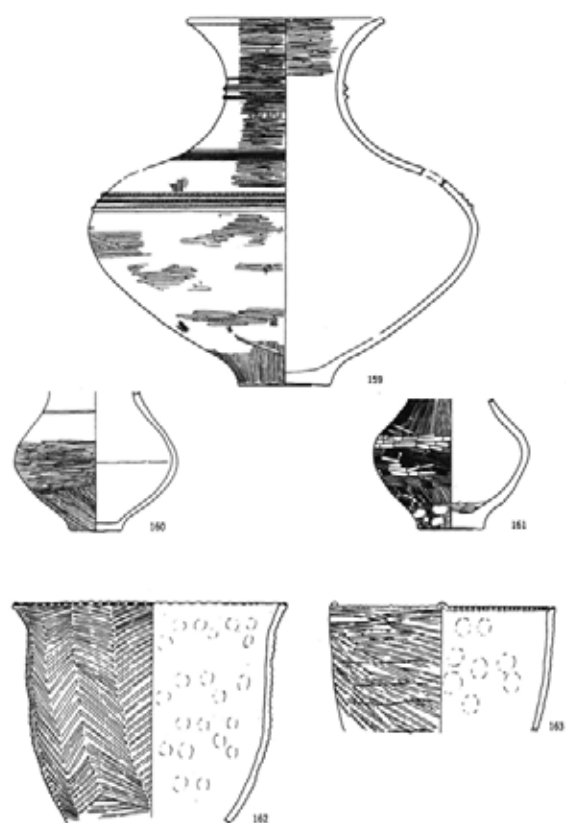
報告書第6図



報告書第7図



報告書第8図



報告書第9図

図5 朝日遺跡56B区出土土器 S = 1/8 (実測図) S = 1/6 (拓図)

(3) 95・96調査区資料の統計処理

今回は朝日遺跡Ⅰ期の資料が従来の出土量を大きく上回るものとなった。そこで、出土資料から様々な分析を加えるためにデータベース化を図った。ただし、Ⅰ期の遺構資料だけでも27リットルコンテナで200箱以上あり、すべての個体をデータ化するには時間がなかった。

そこで、比較的まとまりのあった資料群を中心に個体識別を入念に行ったうえで、口縁部を中心に総個体数の把握、その他の破片からは紋様・調整を中心としたデータを読み取った。対象とした遺構はS B 07、S K 118、96 S D 101である。*

以下、データの一部を取り出して数値化した情報を提示する。

器種構成(表1～3)

総破片数を壺・甕・鉢・壺蓋・甕蓋の5器種について数値化した。器種は遠賀川系土器・条痕紋系土器などを問わず、深鉢は甕に含めて数値化した。％の表記は小数点1位までとし、以下を切り捨てた。したがって、必ずしも合計が100％にはならない。

S B 07

壺49.4％、甕32.9％、鉢15.3％、壺蓋2.1％、甕蓋0％

S K 238

壺50％、甕41.6％、鉢8.3％、壺蓋と甕蓋0％

S D 101

壺42.2％、甕30.5％、鉢18.5％、壺蓋7.6％、甕蓋1％

以上、共通して読み取れることは、壺が優位となり、いずれも約半数を占める点である。他の遺跡、例えば三重県永井遺跡の報告(四日市市教委1973)によると、壺と甕の比率は、4:6の割合で甕が優位である。さらに地域を離れて四国松山平野では壺・甕・鉢の比率から壺が約1/3、甕が約1/2を占め、甕が圧倒的優位にあるとされている(梅木1994)。

これらからカウントの方法に問題があるとも考えたが、今回の調査区の特徴として捉えておく。

系統別構成(表4)

土器の出土量が多く、比較的系統を把握しやすかった96 S D 101資料を扱う。

ここでは、系統を遠賀川系土器(貝殻山A類・貝殻山B類)、条痕紋系土器(貝殻山C類)、削痕系土器(貝殻山D類)に分けて示す。

系統が判別できる資料のうち、壺・甕・鉢の3器種を用い、総数729点から導きだすと、A類74.3％、B類14.4％、C類6.0％、D類5.2％となり、A類が7割強を占める。これを器種別に比較すると異なる比率が浮かび上がるので次に提示する。

壺:A類91.8％、B類7.5％、C類0.6％

甕:A類45.0％、B類29.7％、C類10.6％、D類14.5％

鉢:A類88.1％、B類1.4％、C類(内傾口縁土器)103％

壺・鉢はA類が約9割を占めるのに対して、甕はA類が5割に満たない。B、D、Cの順位で比率が高く、B類の約3割が目にとまる。

B類に関しては、胎土分析の結果から伊勢湾西岸の中南勢産の可能性が高く、朝日遺跡へは搬入品として扱う資料である。

以上、統計処理を行った結果のうち、器種構成と系統別構成比に関して提示した。要約を以下に示す。

(1) 器種構成については、壺が42.2～50％と全体の約半数を占め、甕が優位が一般的であるのに対して今回の調査区の特異性が認められる。

(2) 系統別構成比については、A類が優位であるものの、甕に関してはA類45％に対してB類が29.7％と接近する。

(3) 今回の調査区では器種(特に甕)によっては、他地域からの搬入品である割合が高いことが示唆できる。

*データベース化の作業は、多人数で効率よく明確な基準のもと進めるべきであったが、施紋順序や施紋・調整の工具など細部にわたる観察を目的としたため、対象資料をよく理解した者(静岡大学大学院 早瀬 賢)が専任となって行った。データベースの記述事項は永井と早瀬の協議によって進め、資料化したが、責任は永井にある。

表1 S B 07 器種構成表

	壺	甕	鉢	壺蓋	甕蓋	総数
点数	45	30	14	2	0	91

表2 S K 118 器種構成表

	壺	甕	鉢	壺蓋	甕蓋	総数
点数	12	10	2	0	0	24

表3 S D 101 器種構成表

	壺	甕	鉢	壺蓋	甕蓋	総数
3層	101	62	40	24	1	228
2層	171	114	64	12	6	367
1層	59	63	41	24	1	188
合計	331	239	145	60	8	783

表4 S D 101 系統別構成比

	貝殻山A類	貝殻山B類	貝殻山C類	貝殻山D類	総数
壺	305	25	2	／	332
甕	118	78	28	38	262
鉢	119	2	14	／	135
合計	542	105	44	38	729

3. 朝日遺跡Ⅰ期の土器編年

(1) 遺構出土資料の比較検討

朝日遺跡における遺構出土資料を比較検討し、土器群の前後関係を見いだす。そのうえで、土器群の特徴を抽出し、変遷を考える。

まず、突帯紋系土器と遠賀川系土器の共伴関係が遺構単位で確認できたSB07資料を基軸に、これに近い特徴をもつSK118と貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅰ群を比較検討する。

遠賀川系土器の壺は段→削出突帯→沈線・貼付突帯という型式変化が近畿地方を中心に、土器編年の基軸となってきた。傾向としてこの変化は有効性を持っている。したがって、段を有する壺・甕・鉢が最も古い一群を構成し、突帯紋系土器と共伴することも異論はないはずだ。

SB07から出土した有段の壺(32)・鉢(36)は朝日遺跡の遠賀川系土器において最も古相の特徴をもつ例としてあげられる。これに1条削出突帯、削出突帯少条の壺が伴う(29・33)。甕については資料の混在もあり、問題があるが、胴部上位に1条削出突帯をもつもの(40)がある。

SK118には有段の壺(50)がある。遺構別の記載にも触れたが、改めてSB07の有段の壺(32)と比較しておく。50は粘土帯接合面に段をもつが、ヘラ沈線により削りだす手法「段削出」を採用している。型式変化を考えれば、32から50へと有段の壺が追える。

SB07とSK118を比較した場合、口縁形態の外反にも注目できる。両者とも筒状の短い頸部から口縁部が外反する。SK238は53を例にあげると口縁部がより水平に近く大きく外反する。水平に大きく開く特徴は、その後の壺に継続していく新たな要素である。

したがって、SB07はSK118に先行する土器群として位置付けられる。

貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅰ群では「段削出」の壺が確認できるものの、32のような有段の壺はない。一方、SB07でみられる突帯紋系ケズリ深鉢がある。そこで、SB07の頸部に屈曲をもつ鉢(44)が注目される。44のような形態的特徴は、突帯紋系土器の鉢としては古相を示す。突帯紋最終末段階に比較できる資料がないため予測の域をでないが、頸部屈曲鉢とケズリ深鉢の組み合わせの有無からすると、SB07は先行する土器群となろう。あわせて、前述した壺の特徴から考えると、SB07は貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅰ群に先行する。

では、SK118とはどうであろうか？壺の特徴の点では「段削出」や1条削出突帯、削出突帯少条といった共通する要素をもつ。一方、貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅰ群では突帯紋系ケズリ深鉢がみられ、古い要素が残存する。土器相からみれば、貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅰ群はSK118に先行するが、両者ともSB07の次の段階を示す土器群として考えておく。

次に、SD42・43と貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅱ群を比較する。SD42・43ではSK118に一部みられた頸部から口縁部にかけて大きく開く形態が顕著になる。また、頸部に「指づくね貼付突帯」をもつ壺(82)がみられる。この壺は三ツ井遺跡SB03資料にもみられ、SK118と土器相が近似する段階に出現している。88は頸部に削出突帯を意識した貝殻山B類の壺で、口縁端部の1条沈線をあわせて考えれば、より貝殻山A類に近い。

口縁端部の1条沈線はSK118にも一部みられるが、SD45やSD101にはみられない要素である。

89は有段の甕であるが、有段部分すなわち粘土

帯接合面が不揃い。S B 07段階の土器相に含まれるが、粗雑なつくりを加味すれば、残存するタイプとして捉えておきたい。

90・91は削痕系深鉢で、91は氷式系深鉢の影響が強い。一方、90は遠賀川系甕により接近したタイプで、91にくらべ新しい段階に含まれるもの。

壺蓋は有紋（木葉紋をヘラ描で加え、赤彩で紋様間を埋める79）が含まれ、新しい段階には見られない要素である。

貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅱ群では一部第Ⅰ群に含まれるもの（7-7・9-22）や第Ⅲ群に含まれるもの（8-5・12）がおおよそS D 42・43と併行する段階として捉えられる。

したがって、S D 42・43と貝殻山貝塚第4地点第3貝塚第Ⅱ群はS K 118に後出する土器群として考えられる。

S D 45とS D 101を比較する。

S D 45は壺の紋様として刻みあるいは押圧を加えた貼付突帯、「刻目貼付突帯」「押圧貼付突帯」が新たに要素として加わる。押圧は基本的に指腹を用いてレンズ状をなすものと、指先を用いたものつまり爪痕を残すものがある。前者は伊勢湾西岸域および濃尾平野に広く分布するが、後者は現状では西志賀遺跡と朝日遺跡の2遺跡で確認できるのみ。いずれにしても、刻目貼付突帯は近畿地方と通有の紋様であるのに対して押圧貼付突帯は伊勢湾周辺の地域色を示す紋様である。

ところで、S D 101では刻目貼付突帯・押圧貼付突帯と横位沈線帯の組み合わせが見られる。貝殻山B類では押圧あるいは刻みを施した貼付突帯と半截竹管状工具の背部による横位沈線帯の組み合わせが見られる。貝殻山A類では沈線紋帯と押圧貼付突帯・刻目貼付突帯が複帯構成をなすことはほとんどない。S D 101にみられる265・313のように沈線紋帯と刻目貼付突帯が複帯構成をなす例は貝殻山B類からの影響あるいは新たな紋様構

成と考えられる。

この刻目貼付突帯と沈線帯が連続した紋様構成を貝殻山A類と貝殻山B類で比較した場合、相違点がある。貝殻山A類は沈線帯の下位に刻目貼付突帯が施され、貝殻山B類は刻目貼付突帯の下位に沈線帯が施される。つまり、刻目貼付突帯と沈線帯の上下関係が入れ替わっている。

貝殻山A類の壺の器形にも相違点がある。

壺の器形は最大径の位置によって変化が読み取れる。

器形A、胴部下位に最大径があり、撫肩で下膨れの無花果形をなすもの。

器形B、胴部中位に最大径があり、やや胴部が張り算盤形をなすもの。

器形C、胴部中位あるいはやや下位に最大径があり、胴部が強く張り出し扁平な形をなすもの。

器形D、胴部中位あるいはやや下位に最大径があり、胴部が張らず撫肩となり球胴に近い丸みを帯びた器形をなすもの。

おおよそ器形Aから器形Dへの変化が認められる。因みにS B 07・S K 118は器形A、S D 42・43は器形AとB、貝殻山貝塚第4地点第Ⅲ群は器形Bが比定できる。

S D 45は97に見られるように器形C、S D 101は器形Cと器形Dが見られる。器形の変化からもS D 45はS D 101に先行する。

貝殻山B類の甕は口縁部の屈曲により型式変化が読み取れる。S D 45の103は水平近くまで屈曲するが、S D 101の221・222のように水平あるいは折れ曲がり垂下することはない。同じような傾向は貝殻山A類もある（187など）。

貝殻山A類の甕は口縁部の屈曲だけでなく、胴部形態も指摘できる。S D 101では、口径と等しいかやや小さく胴部上位に膨らみをもつタイプが顕在化する。

S D 45とS D 101の先後関係は、相対的にはS

D 101が新しい要素をもつものの、S D 45はS D 101の古相を示すと考える。

(2) 朝日遺跡 I 期の時期区分

A 遺構単位の組列

遺構単位の比較検討により、先後関係が明らかになった。そこで、今一度変遷を示し、そのうえで、時期区分を行いたい。遺構単位で時間的組列をあげると、次のようになる。

S B 07

↓

S K 118 / 貝殻山第 4 地点第 3 貝塚第 I 群

↓

S D 42・43 / 同上第 3 貝塚第 II・III 群

↓

S D 45 / S D 101 古相

↓

S D 101 新相

B 時期区分

I - 1 期

S B 07を古段階、S K 118および貝殻山第 4 地点第 3 貝塚第 I 群を新段階とする。

遠賀川系土器の壺・甕を主体に、壺蓋と甕蓋が少量伴う。さらに突帯紋系土器のうちケズリ深鉢と鉢がある。

壺は有段となるものがみられ、「段削出」による段は後出するものとし、古・新とした。このほか古・新を問わず、1 条削出突帯、削出突帯少条、沈線少条の壺が伴う。口縁端部 1 条沈線が新段階に出現する。

壺の器形は、胴部下位に最大径があり、撫肩で下膨れの無花果形をなすもの（器形 A）がある。

甕は 1 条削出突帯が胴部上位に施すものや沈線 1 条～ 2 条のことが多い。

甕の器形は口縁部が短く外反し、胴部から底部にかけて緩やかにすばまる。

鉢は有段のものと沈線 1 条のものがある。

壺蓋は貼付突帯やヘラ描によって加飾するものと無紋のものがある。

甕蓋は裾部は不明であるが、頂部付近に 1 条削出突帯を施す。器形は裾部に向かって緩やかに外反する。

I - 2 期

S D 42・43と貝殻山第 4 地点第 3 貝塚第 II・III 群が相当する。

壺は削出突帯少条が主体となり、これに「指づくね貼付突帯」が伴う。口縁端部 1 条沈線が顕在化する。口縁部の外反が進み、水平近く屈曲する形態も増加する。

壺の器形は、胴部下位に最大径があり、撫肩で下膨れの無花果形をなすもの（器形 A）と胴部中位に最大径があり、やや胴部が張り算盤形をなすもの（器形 B）がある。この時期の後半に貝殻山 B 類の壺が成立すると考えられる。

甕は 1 期とあまり変化がないが、有段のものはこの時期まで残存する可能性がある。

削痕系深鉢については、古相と新相がある。氷式系削痕系深鉢と遠賀川系の甕に接近する削痕系甕は三ツ井遺跡や月縄手遺跡の例と先後関係にある。

条痕系土器については、この時期まで口縁部が外反しない直立する口縁と胴部の条痕に横位条痕を採用する。壺は深鉢と同様に口縁部が外反せず、口縁下に押圧突帯を巡らすものが多い。内傾口縁土器については、今回の資料群では確認できなかったが、三ツ井遺跡の例を参考とすればナデ系の内傾口縁土器が伴うと考えられる。

壺蓋は有紋のものがヘラ描沈線による木葉紋などを主体とし、貼付突帯による加飾はなくなる。

2 期は三ツ井遺跡や月縄手遺跡の資料が良好で、むしろ朝日遺跡に良好な遺構単位で示すものが少ない。細分は可能であるが、今回の資料群で

は保留しておく。

I-3期

S D45を古段階、S D101を古～新段階とする。

壺は「刻目貼付突帯」と「押圧貼付突帯」が出現する。1条単帯が多いが、2条複帯は1条を2分割して複帯とし、それぞれに刻目あるいは押圧を加える場合が多い。

古段階では沈線帯と貼付突帯が連続して紋様帯を形成することはなかったが、新段階において貼付突帯が顕在化することによって紋様帯の組み合わせが複雑になる。

壺は胴部中位あるいはやや下位に最大径が位置し、胴部が強く張り出し扁平な形をなすもの（器形C）と、胴部が張らず撫肩となり球胴に近い丸みを帯びた器形をなすもの（器形D）が新段階に加わる。

貝殻山B類の壺が顕在化し、大型壺として定着する。

甕は新段階に貝殻山A類・B類を問わず、口縁部が水平に折れる。貝殻山B類は口縁部が垂下するものもある。

壺蓋は無紋化が進行し、甕蓋は裾部から急速に立ち上がる。

把手付鉢が出現する。また、2期に出現する刻目突帯が口縁直下あるいは口縁外面に接する逆L

字口縁をなす鉢（甕）は、この時期にも認められる。把手付鉢は近畿地方と通有の器形で広域に分布し、時期が限定されるものとして注目できる。刻目突帯を有する鉢あるいは逆L字口縁鉢は瀬戸内型甕に類似し、この時期に前後して新たな器種組成を担う。

条痕紋系土器は、壺・深鉢ともに出土頻度が低い。56B区資料を補完させると、口縁端部をナデで仕上げる壺と押引紋を加える壺とが混在する。胴部の調整は縦位羽状条痕が基本となるが、横位あるいは斜位条痕も存在する。頸部には単帯あるいは複帯の波状紋が付くものもある。

深鉢は口縁が外反し、甕化指向が強くなる。胴部調整は縦位羽状条痕が多い。

内傾口縁土器はこの時期に条痕系が加わり、さらに口縁部の内傾が進行し、より厚口鉢に近い器形へと変化する。

以上、大きく3時期区分、細分6段階を提示した。2期の細分は現状の朝日遺跡資料では可能性の域をでないが、前述した三ツ井遺跡・月縄手遺跡の資料から小時期区分は可能である。また、3期の区分は高蔵遺跡の環濠資料で追認できる。

これら、周辺遺跡を含めた細分案は改めて提示する。ここでは、遺構単位の参考材料として一覧表を提示しておく（表5）。

表5 尾張平野・名古屋台地の遺跡一覧表

遺跡	遺跡名	突帯紋Ⅱ-1	突帯紋Ⅱ-2	1-1古	1-1新	1-2古	1-2新	1-3古	1-3新	1-4古	1-4新/Ⅱ-1
1	西浦		△・□	△	△	△・○					
2	山中	□	SD017層					SK15	SK11 SK09-SK01	SK04-SK22	?
3	八王子										
4	下り松	□									
5	馬見塚	□	?					○○	○○	?	
6	佐野							○○	○○		
7	三ツ井		?			○		○○	○○		
8	三ツ井		SK01 SK02土器集中地帯	SK10 SK03	SK01 SK02	SK01 SK02					
9	古蔵									?	?
10	ノンバ								?		
11	古蔵					○					
12	津本					○					
13	野口北出							SK04-SK02 SK07	SK01		
14	朝日		?	SK07 SK106	SK118 SK117 SK112	SK02-07		SK03 SK04 SK01		○○	○○
15	西志賀					○	○○	○○	○○	○○	?
16	月縄手Ⅰ					SK19 SK24	SK25				
17	月縄手Ⅱ					SK001-SK106 SK154-SK152 SK153-SK151	SK156 SK154 SK101				
18	新河川	?	SK007層（Ⅱ）	○・□	○	○	○○	SK030土器（Ⅱ） SK05（Ⅱ）		○○	?
19	古沢町		2号溝	1号溝（貝類）	1号溝（土器）						
20	高蔵							BD-D10	SK05	?	?

凡例 □：突帯紋系土器
○：高蔵系土器（貝殻山A類）
●：高蔵系土器（貝殻山B類）
△：条痕紋系土器（貝殻山C類）

4. 朝日遺跡Ⅰ期の遺構変遷

～95・96調査区を中心として～

Ⅰ-1期

溝による区画が存在しない時期。堅穴住居(SB07)や廃棄土坑と思われるSK118など散漫な遺構が展開する。おそらく、北側の貝殻山貝塚周辺にも同様な遺構が展開すると考えられる。

Ⅰ-2期

SD42・43とSD45によって区画された溝を中心に遺構が展開する。SD42・43に沿って南側に隣接して見られるSD155やピット群はこの時期に伴うものと考えられる。

Ⅰ-3期

推定東西約150m、南北約100mの環濠の時期。遺構の中心は調査区の北側に推定できる。また、95調査区西北端に庇付の掘立柱建物が1棟ある。朝日遺跡を東西に縦断する谷を挟んで北側に条

痕紋系土器が主体?となる包含層がみられる。この56B区周辺が居住域か否かは確定できないが、貝殻山貝塚周辺と対称的な土器組成は注目できる。

その後の遺構

SD101をⅠ期末に再掘削し、これとほぼ同時期に南側を併行してSD102が掘削される。SD101に並行して貝殻山貝塚周辺を囲むのかは不明であるが、Ⅱ期にはより東側に大きく遺構が展開する。また、56B区も同じくその東側に大きく遺構が展開し、谷を挟んで北居住区と南居住区を生み出す。

このように、Ⅰ-3期以降に集落が分化したとも想定でき、Ⅰ-3期は後の居住区を成立させた前身として重要な時期である。

課題と展望

朝日遺跡Ⅰ期をめぐって、土器資料、とくに遠賀川系土器の変遷について稿を進めてきた。その結果、朝日Ⅰ期を大きく3期区分、細分6段階を提示することができた。

1期は遠賀川系土器の出現期、2期は定着期、3期は展開期として想定できる。

1期については、表5に示したように突帯紋期の最終末(突帯紋Ⅱ期2段階)に朝日遺跡あるいは馬見塚遺跡など一宮市周辺への遠賀川系土器の流入は想定できる。実際、岐阜県美濃加茂市野笹遺跡では、この段階に併行する在来型の突帯紋系土器と遠賀川系土器の共存関係が想定されている。

Ⅰ期の壺について、頸部に段を有するものはすでに頸胴部界の削出突帯と組み合わせられている。したがって、段のみの壺は存在しないのか、ある

いは突帯紋Ⅱ期2段階に存在するのかは今後の資料如何による。

2期については、朝日遺跡の場合、遺構が少ない。おそらく貝殻山貝塚資料館敷地内に遺構が展開すると思われる。これは3期も同様である。

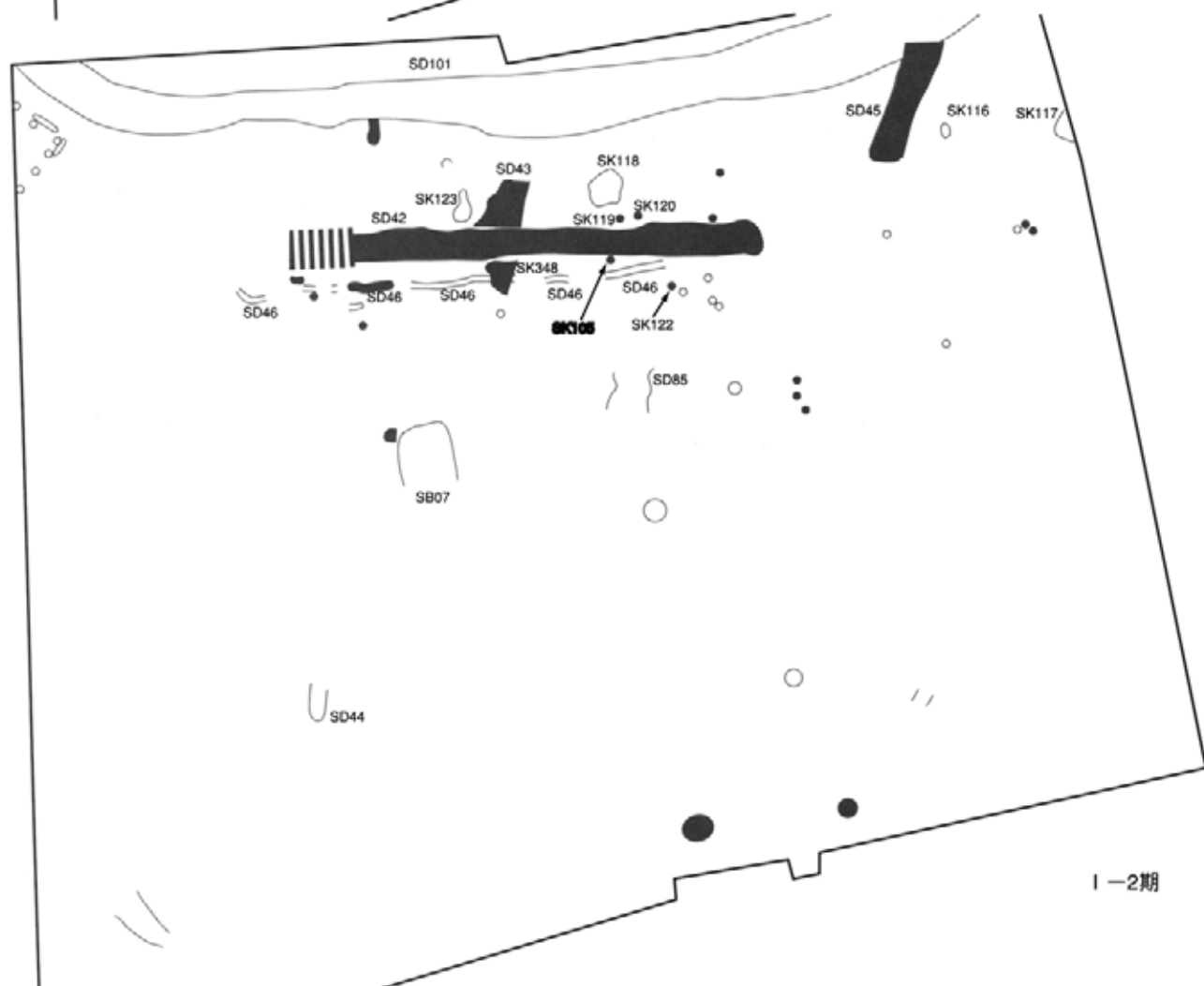
2期の新段階には貝殻山B類は成立しており、伊勢湾周辺に在来型の遠賀川系土器が出現する。

3期は朝日遺跡において想定ではあるものの、貝殻山貝塚資料館の敷地を囲む環濠が出現する。伊勢湾周辺では最大規模、100×150mを囲む環濠である。

遠賀川系土器は東部瀬戸内系の刻目貼付突帯甕(鉢)や有段口縁壺、近畿地方にみられる把手付鉢など、短期間に存在したと思われる広域共有器種が認められる。その一方で、一宮周辺で成立した削



I-1期



I-2期

图6 95·96区前期遺構変遷図(1)



図7 95・96区前期遺構変遷図(2)

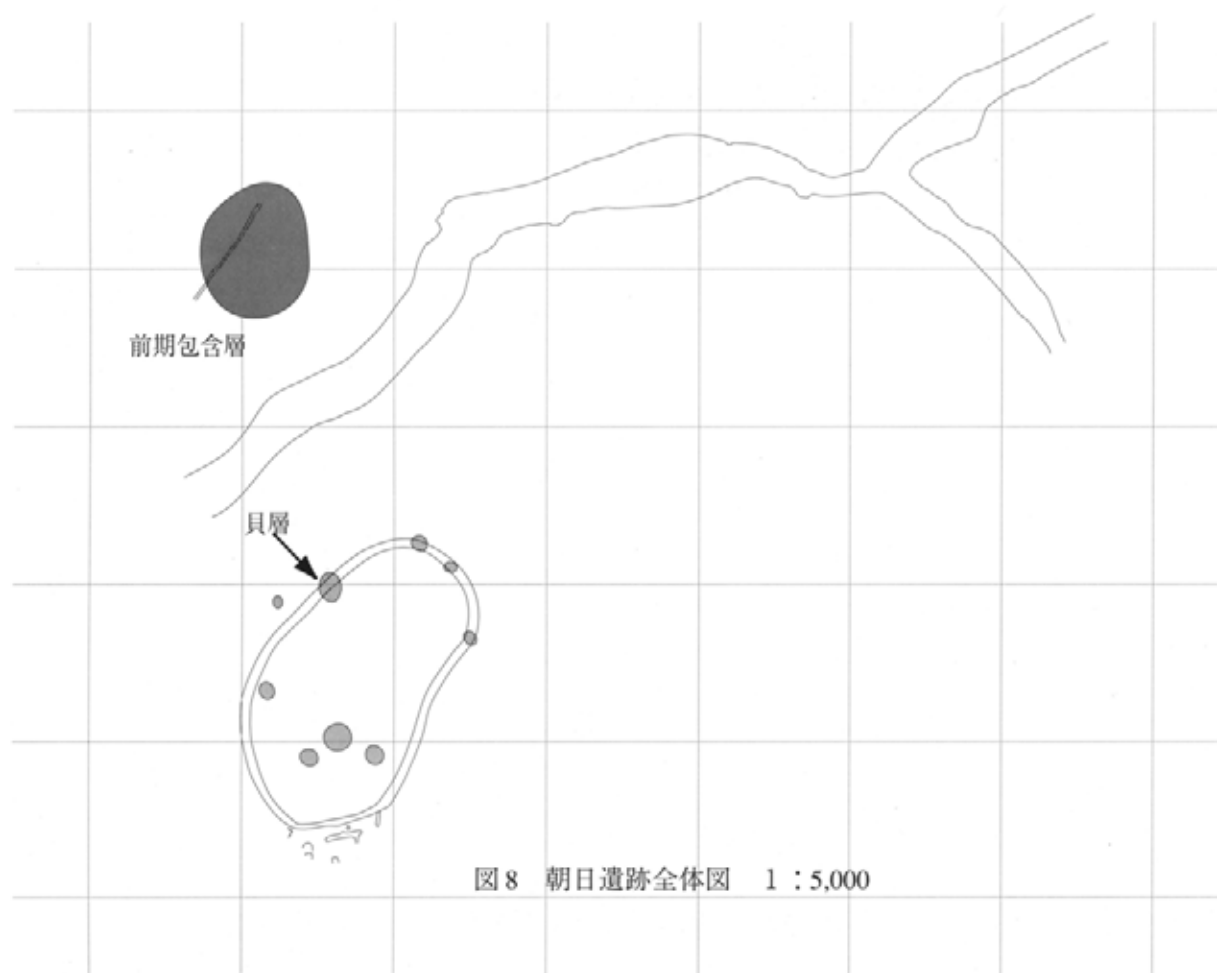


図8 朝日遺跡全体図 1:5,000

痕系深鉢は古段階をもって極一部の遺跡（八王子遺跡など）を除いて消滅する。

最後に、今回の遺構群では確認できなかった4期について触れる。

朝日遺跡の場合、壺を指標にした場合、頸部沈線が10条以上となるものが見られる。櫛状工具あるいは二枚貝腹縁による直線紋帯（櫛描紋系土器）とは識別できる1条ずつ施される沈線で構成される。これが、Ⅱ期と共伴するか否かについては、現状において不明である。おそらく、遺跡ごとあるいは遺構ごとに様相がことなる。すなわち、遠賀川系土器群と櫛描紋系土器群が共伴するしないといった組み合わせが混在すると思われる。したがって、櫛描紋系土器の成立をもってⅡ期とするならば、朝日遺跡にはⅠ－4期の存在は

型式学的組列にしか認められない。

山中遺跡のように、土器様相や遺構の新旧関係が認められる場合、はたしてどのように評価すべきか？今後の課題となる。

また、壺のみではなく、甕、いわゆる「朝日形甕」の成立も追及しなければならない。Ⅱ期の甕を表面観察すると、貝殻山B類の胎土に酷似するものが多くみられ、口縁端部の形態も肥厚する点において共通し、型式変化が追える。ただし、1次調整にハケ、2次調整に二枚貝腹縁を用いる手法は伊勢湾西岸の上箕田遺跡に比較的多く見られるのみである。今後の資料増加あるいは、胎土分析による産地同定が課題となる。

参考文献（主要なものに限った）

- 紅村 弘 1956「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器の関係」『古代学研究』13号古代学研究会
吉田富夫・紅村 弘 1958『名古屋市西志賀貝塚』（名古屋市文化財叢書第19号）
久永春男 1966『東海』『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代河出書房新社
小玉道明ほか 1973『永井遺跡発掘調査報告』（四日市市埋蔵文化財調査報告7）四日市市教育委員会
重松和男編 1988『高蔵貝塚』Ⅲ（南山大学人類学博物館紀要第10号）
松田 調編 1990『月縄手遺跡 貴生町遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第12集）
服部信博編 1992『山中遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集）
石黒立人 1992『V 2-2 遠賀川系土器』『山中遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集）
梅木謙一 1994『西瀬戸内地方の弥生時代前期土器』『牟田裕二君追悼論集』同論集刊行会
樋上 昇編 1994『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ 月縄手遺跡Ⅱ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集）
豆谷和之 1995『前期弥生土器出現』『古代』99号早稲田大学出版会
樋上 昇 1997『八王子遺跡』『年報』平成8年度（財）愛知県埋蔵文化財センター
土本典生 1998『元屋敷遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報13』愛知県教育委員会ほか
田中伸明編 1999『三ツ井遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集）
永井宏幸 1999『弥生時代前期の諸問題』『三ツ井遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集）
北條献示編 2000『野口・北出遺跡発掘調査報告書』稲沢市内遺跡発掘調査委員会
村松一秀編 2000『松河戸遺跡－安賀地区発掘調査の概要－』春日井市教育委員会

図版参考文献

- 石黒立人編 1994『朝日遺跡V』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集）：図5
柴垣勇夫ほか編 1972『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会：図3・図4